



＊ 研究会報告 ＊

租界班 第 52 回研究会

「京城『モダン』の地図を読む」

日時：2016 年 7 月 15 日（金）15:00 ～ 17:00

場所：神奈川大学横浜キャンパス 1 号館 308-1 号室

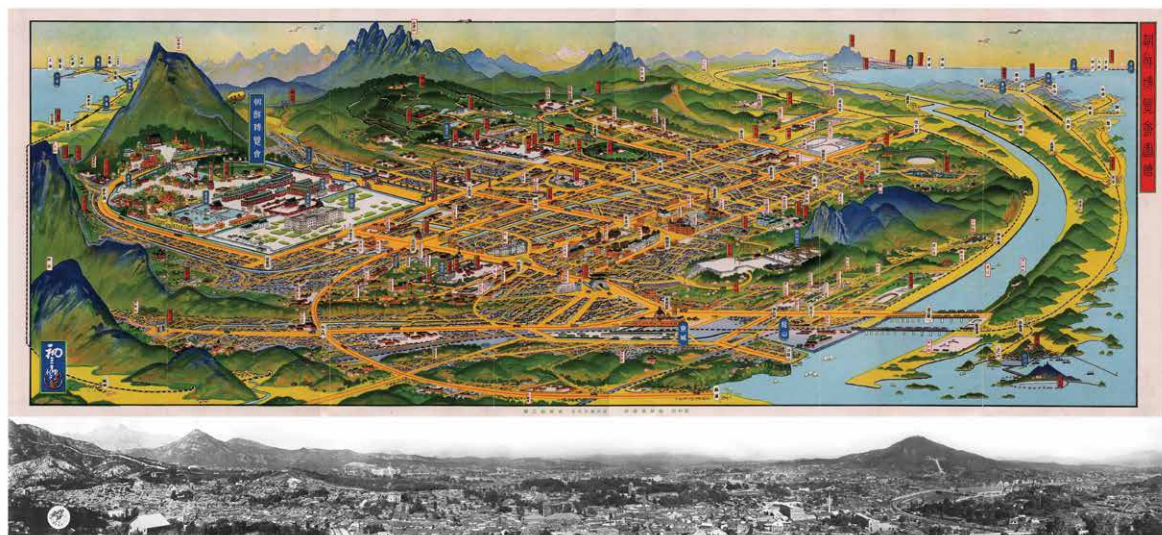
富井 正憲（韓国・漢陽大学 客員教授）

観光旅行時代の 3 枚の地図

600 年の歴史を持つ大韓民国の首都ソウルの日本時代の空間構造と、その都市のなかで暮らした朝鮮人と日本人の生活文化を、地図を用いてビジュアルで紹介したいと考えている。これまでまとめたソウルの地図としては 2006 年にソウル歴史博物館が出版した地図帳『ソウル地図』がある。ここには約 80 種類の地図がまとめて掲載されている。朝鮮王朝時代・漢城の古地図、日本植民地期・京城の近代地図、戦後ソウルの現代地図である。今回私が取り上げる地図は、京城時代の 3 種の地図である。地図帳のなかに収録されている三重出版社京

城支店発行の「京城精密地図」（1933 年発行）と、その地図帳にはない吉田初三郎作の「朝鮮博覧会図絵」（1929 年発行）と小野三正作の「大京城府大観」鳥瞰図（1936 年発行）である。3 枚ともに施政 20 年を過ぎた植民地都市・京城の全体を描いた色刷りの図である。それぞれ表現方法が異なり、1 枚は地図、ほかの 2 枚は図絵と鳥瞰図である。人々がバス、汽車、船に乗り、観光や旅行を楽しむ時代になり、それまでの専門的な測量地図のなかから、一般人にもわかりやすく親しみやすい表現の地図が出てきた時代である。

朝鮮博覧会図絵



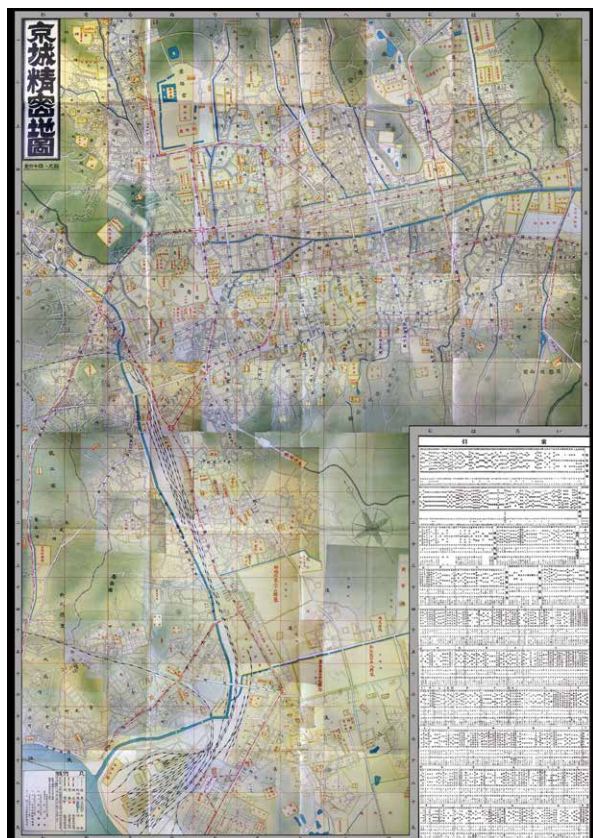
吉田初三郎作の「朝鮮博覧会図絵」（朝鮮総督府発行所、名古屋観光社印刷、1929 年 9 月発行）は施政 20 周年を記念して朝鮮博覧会用に描かれた京城である。都市の特性を象徴的にデフォルメした美しい色彩の俯瞰図で

ある。正確さには欠けるが都市構造がイメージしやすい。東西南北に位置する四つの山を城壁がつなぎ、盆地の城内中央に清溪川が流れ、城外の漢江に延びる。城内の南側には日本人の銀座街・本町や明治町が栄え、北側には

朝鮮人の商店街・鐘路が広がる。完成したばかりの朝鮮総督府、朝鮮神宮、京城府、京城駅の各建物、それに地上には電車、汽車、海には船、空には飛行機がみえる。郊外には海に続く漢江、ゴルフ場、飛行場、さらに遠く彼方には上海や東京までが描かれている大パノラマ図である。朝鮮時代の風水城郭都市に、新たに植民地と近代を象徴する施設が実にわかりやすく美しく描かれた、手持ちサイズの旅行観光者用の折りたたみ京城案内図である。

俯瞰図絵師の吉田初三郎(1884年～1955年)は、美しい名所図絵を生涯に1600枚以上描いた。その絵は近代の都市や田園の風景を大胆にデフォルメした俯瞰図で、鉄道を中心とした旅行観光用におおいに人気があった。吉田初三郎は総督府の依頼により1927年と1929年の2回にわたり朝鮮に赴き、27点の美しい図絵を制作したといわれる。

京城精密地図



三重出版社京城支店発行の「京城精密地図」(1933年発行)は平面的な測量図のなかに番地や地名、それに700以上の索引等豊富な情報が入っている地図である。山や宮殿は美しい彩色によって区別している。縮尺は1

／4000と大きいために、官公庁はもちろん劇場や百貨店、さらに主要な商店までが記入されている。例えば梶山季之の小説『京城・昭和十一年』などを読むときに、目の届く位置にはっておくと実に楽しい。地図は中心部と龍山部の2枚からなり、1枚のサイズはタテ80cm、ヨコ105cmと大きい。このほかに、さらに地番と敷地形が詳細な大京城精図(縮尺1／6000、1936年発行)もあり、こちらは研究者には有り難い精細図であるが、民間建物も表示されていないために一般向きではない。

大京城府大観

小野三正作の「大京城府大観」(1936年発行)は植民地都市・京城の景観をわかりやすく、かつ正確に表現している立体的な「鳥瞰図」である。日本の朝鮮施政25周年を記念して1936年に朝鮮新聞社から発行された、タテ142cm、ヨコ153cmの掛け軸仕立ての鮮やかな色刷りの鳥瞰図である。一般の人達が都市景観を容易に理解できることを目的とした立体的な編集地図であることは吉田初三郎の「絵図」と同じであるが、科学的な鳥瞰地図を制作することを目的にしているために、そこに描かれている景観は驚くほどに正確である。大鳥瞰地図に描かれている範囲は当時の京城府を中心にして、ほかに別枠で仁川、永登浦、明水台が添えられている。地図の縮尺はおおよそ1／5000をベースにしており、山河や街路、それに建物が立体的に描かれている為とその階層や屋根形状まで判読でき、かつ各建築がその用途や構造材料によって色分けされている。地図の作成法は陸地測量地図を下敷きにして、それに航空写真と建物の外観写真を使って描いている。吉田初三郎の描くイメージ「図絵」とは大きく異なり、あくまでも正確な「地図」である。

「大京城府大観」を仔細に観察すると、上空から俯瞰した都市の風景が黄金町通り(現・乙支路)を境に上下に分かれているのがはっきりと認められる。これまでは日本人と朝鮮人の地域の境界は清溪川といわれていたが、この地図によって再考する必要があるが出てきた。黄金町より上方の北地域は古くからの平屋建ての朝鮮家屋がぎっしりと埋まり、下方の南地域には新しい2階建ての日本家屋が多くを占める。地域名も北地域には伝統的な「洞」名がそのまま残り、南地域には日本流の「町」名が新しくついている。都市空間が朝鮮王朝時代の身分による住み分けから、民族の住み分けに移行したことが



視覚的に確認できる。この頃の京城府の総住戸数はおおよそ 12 万戸であり、このうち 4 軒に 1 軒を日本人住宅が占めるまでになっていた。

現在、われわれ研究チームはこの「大京城府大観」を対象に、その制作方法、構図、構成要素、また先に上げた日本人朝鮮の境界や住み分けについてさらに詳細な分析を行い、当時のソウルの都市景観の特徴等についての考察を続けている。

実は「大京城府大観」地図はこれまでごく少数の人達にしか、その存在が知られていなかった。もちろん 2006 年刊行の『ソウル地図』にも掲載されていない。筆者がその存在を初めて知ったのは、2011 年の「異邦人の瞬間捕捉—京城・1930」展を、ソウルに続いて東京・横浜で開催したときのことであり、来館された京城生まれの来場者から偶然に教わったのである。その後も奇縁に導かれるようにその希少な地図を入手することができ、2015 年にソウル歴史博物館から一冊の本として刊行し、日本の図書館や研究機関にも寄贈した。こうした

因縁のある地図を本研究会で発表する機会に恵まれたことに深く感謝するとともに、皆さんに「大京城府大観」の存在を広く知っていただき、各分野で大いに利用していただくようお願い次第である。